

モーツァルト巡礼—その7

K.518 水谷 康男

一年前に、ケッヘル番号順から外れて、交響曲を順番に巡ったのですが、そのあと、K82に戻らねばならないのを、何を血迷ったのか順路を外して K135 から再開して K175 まで巡りました。という事で、K82 から K131 までをとばしてしまったので、今回はその K82 から巡礼を続けます。

K82 と K83 はアリア「もし敢えて望めば」と「もしわが悩みのすべてを」です。いずれの曲も、1770年4月頃にローマで作曲されました。いずれもソプラノ独唱で木管と弦楽の演奏に乗って歌われます。歌詞はメタスタジオの「デモフォーンテ」を利用しています。

K84 は以前の交響曲で立ち寄ったので、次は K85 です。ミゼレレ(主よ哀れみ給え) イ短調です。1分前後の8つの小曲からなり、オルガンの伴奏(通奏低音)で、アルト、テノール、バスの3声で歌われます。1770年7月から8月にかけてボローニャで作曲されました。当地では、対位法の大家パドレ・マルティーニに教えを乞うて、この作品はその時の習作曲とみなされています。

K86 は、アンティフォン(対唱、交唱)「まず神の国を求めよ」で、1770年10月9日、ボローニャにて作曲された無伴奏の4声部の短い曲です。14歳のモーツァルトがアカデミア会員の入会試験の課題で作曲したものです。半時間で作曲したもの(普通には3時間は要するところ)で、審査員と立ち会った会員の絶賛を浴びたといわれています。

K87 は、オペラ「ポントの王 ミトリダーテ」です。3幕のオペラ・セリアで、1770年、イタリアの旅の間に作曲されたもので、同年12月27日にミラノの王室ドゥカーレ劇場で初演され、同劇場で20回も続演され、毎回満員という大好評を受けました。2時間半を超える作品です。幸いにも2006年ザルツブルク音楽祭の録画があり、お蔵入りしていましたが、やっと鑑賞することができました。



マルク・ミンコフスキの指揮によるルーブル宮音楽隊の演奏なので、とてもキレの良い音楽でした。15歳の作品とは思えない充実した音楽です。ただし、演出が?で、グロテスクな舞台に、後半は音楽だけを楽しみました。オペラ・セリアのためか、ほとんど取り上げられなくなっていますが、残念なことです。

K88 は、アリア「あまたの苦難に会いて」で、1770年2月か3月にミラノで作曲されたオーボエ・ホルン・トランペット各2本と弦楽器(Vn2部、Va2部、チェロ・バス)に乗ってソプラノで歌われ、10分程の曲です。

K89 は キリエ ト長調で、ソプラノ5部無伴奏、1770年5月のローマで作曲された、5分ほどの習作的な作品です。

K90 も キリエ ニ短調ですが、この全集には録音されておらず。さらに、モーツァルトの真作かどうかなど、詳細は不明です。

K91 も キリエ ニ長調ですが、ロイター作とされて、断片が残っているだけで、詳細は不明です。

K92 は サルヴェ・レジナ へ長調 とありますが、今では偽作とされており、詳細は不明です。

K93 は 詩篇 129「われ深き淵より主に叫べり」ですが、現在ではモーツァルト以外の作とされており、この全集にも収録されていません。

K94 は メヌエット ニ長調 で、ハープシコードで演奏されている、1分半の小品です。1770年4月にボローニャカローマで作曲されたといわれていますが、諸説あってモーツァルトの作品でないかもしれません。

K95 から K98 までは、交響曲で、前述していますので省略。

K99 は、カッサシオン※ 変ロ長調で、オーボエ・ホルン各2と弦5部で演奏されます。1969年の夏にザルツブルクで作曲されました。全7楽章よりなる20数分の軽快な曲です。

※カッサシオン(Kassation(独) cassazione(伊) cassation(仏・英))とは、1750年頃から1775年頃にかけて流行した管弦楽曲の形式の1つ。セレナーデやディヴェルティメントと同様、小曲を連ねた多楽章の形式をとり、晩餐会などのパーティで演奏された祝典音楽の1つである。ディヴェルティメントが屋内、カッサシオンとセレナーデが屋外での演奏のためという区別はあるが、明確ではなく、三者は実質的にほぼ同じものであると考えられている。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

K100 はセレナーデ第1番 ニ長調 です。全8楽章よりなる、25分位の曲です。K99と同じく1969年夏にザルツブルクで作曲され、オーボエ(またはフルート)・ホルン・トランペット各2本と弦5部のオーケストラで演奏されます。K62の行進曲をこのセレナーデの開始曲として全9楽章として演奏される場合もあります。

K101 は、セレナーデ 第2番 ニ長調 /4つの田園曲 /4つのコントルダンス で、作曲年代は不明で、ザルツブルクで1776年の謝肉祭時分の作として、K番号もK250aに移されています。オーボエ・ホルン各2本、フルート・ファゴット各1本、ヴァイオリン2部、チェロ・バスという編成の7分位の小品です。

K102 は、前述の交響曲。

K103 から K105 は、19(20)のメヌエット、6つのメヌエット、6つのメヌエットです。いずれも1771年から1772年かけて作曲されました。

K103 は、旧全集では19曲で、新全集では20曲とされており、この全集では、20曲のメヌエットとして録音されています。フルート(またはオーボエ)・ホルン(またはトランペット)各2本、ヴィオラなしの弦3部という編成で、演奏時間45分かかります。

K104 は、6曲のメヌエットよりなり、1771年から72年にかけての冬に作曲されました。オーボエ・ホルン・トランペット各2本、ピッコロ1本、ヴィオラなしの弦4部という編成で10数分かかります。

K105 は、前曲と同じく6曲のメヌエットで、同じころに作曲されました。フルート1、オーボエ・フルート各2、ヴィオラなしの弦3部という編成で、長さも同じく10数分かかります。

K106 は、序曲と3つの田園舞曲(コントルダンス)ですが、ケッヘルは1770年の作として、コンサーートのケッヘル番号を付けましたが、現在では1790年1月の作とされて、K第3版以降K588aに移さ

れました。また、このCDセットには収録されておりません。

K107は、クリスティアン・バッハのソナタによる3つのピアノ（チェンバル）協奏曲です。いずれもヴィオラを除くヴァイオリン2部、チェロ・バスの弦3部に独奏ピアノよりなる編成で、1曲目がニ長調で、C.バッハのクラヴィアソナタ op5-2が原曲で、3楽章よりなります。2曲目がト長調で、C.バッハのクラヴィアソナタ op5-3が原曲で、2楽章よりなります。3曲目が変ホ長調で、C.バッハのクラヴィアソナタ op5-4が原曲で、2楽章よりなります。

このCDセットでは、この3曲のあとに、原曲であるC.バッハのソナタも録音されており、粹な扱いにうれしくなりました。

K108は、レジナ・チェリ(聖母交唱)ハ長調です。これは、4つの句からなる固定文を4つの楽章に分けて独唱・合唱を伴う交響曲のように作曲しています。1771年5月にザルツブルクで作曲されましたが、第1回のイタリア旅行から帰って間もない頃で、イタリアの影響を受けてシンフォニア風のコンチェルトな形式と、オペラ的なアリアの楽章が加えられています。

K109は、リタニア(聖母連祷)変ロ長調で、1771年5月にザルツブルクで作曲されました。これもザルツブルクの楽団事情から、ヴィオラなしの弦3部と通奏低音ですが、のちに3本のトロンボーンが追加され、声楽部分は独唱4、混声4部合唱により、キリエ、聖マリア、病人の回復、天使の元后、神の子羊の短い5部よりなります。(演奏時間10分余)

K110は交響曲第12番で、前述。

K111は、2幕の劇場セレナータ「アルバのアスカーニョ」です。1971年10月17日ミラノでフェルディナント大公の結婚式の祝典のために作曲・初演されました。フルート・オーボエ・ファゴット・ホルン・トランペット各2、ティンパニ、弦5部、ソプラノ3、メゾソプラノ・テノール各1、混声合唱、男声合唱、女声合唱により演奏されます。全2幕序曲と33曲よりなる。オペラではなく、祝典劇といえます。

K112 交響曲 第13番 ハ長調 と 一つ飛んで K114 交響曲 第14番 イ長調 は、前述。

K113は ディヴェルティメント 第1番 変ホ長調です。全4楽章よりなる、演奏時間10数分の佳曲で、1771年11月ミラノで作曲されました。クラリネット・ホルン各2本と、ヴァイオリン2部とヴィオラ、チェロ・バスの弦楽器群により演奏されます。この曲の特色として、モーツァルトの管弦楽作品で、初めてクラリネットが使われたことです。これは、当地ミラノのオーケストラにはクラリネットがあったため、当時ザルツブルクでは、まだクラリネットはなかったからです(1777年まで)。特に第2楽章でのクラリネットの存在は印象的です。

K115はミサ・ブレヴィス ハ長調で、未完成で、このCD全集には収録されていませんでした。

K116も、ミサ・ブレヴィス ハ長調で、これも未完成で、キリエだけが残っていますが、この曲も収録されていません。

K117は、奉納唱「ほむべきかな父なる神」ハ長調で、短い3章よりなる8分余りの佳曲です。作曲年代については諸説あってケッヘル第3版ではK66aとなっております。フルート・ホルン・トランペット各2、ティンパニ、ヴァイオリン2部、ヴィオラ2部、チェロ・バス・オルガンの楽器群に加えて、ソプラノ独唱と混声合唱により演奏されます。

K118は、オラトリオ「解放されたベトゥーリア」で1771年パドゥバの貴族ヒメネス侯の注文で作曲

された演奏時間 2 時間に及ぶ大作です。声楽陣は、ソプラノ 3，アルト・テノール・バス各 1 と合唱よりなり、オーケストラはオーボエ・ファゴット・トランペット各 2、ホルン 4，ヴァイオリン 2 部、ヴィオラ、チェロ・バスよりなります。印象的なニ短調の序曲に始まり、2 部に分かれた全 16 組のレシタティーボとアリアで構成されています。

K119 は、アリア「素晴らしい愛の気持ちは」で、作曲年代、作曲動機諸説あり、現在では 1782 年ウィーンでの作とみなされています。オーケストラ伴奏で書かれていましたが、現在ではピアノ伴奏でしか存在しないといわれていますが、諸説あるようです。この CD では、オーケストラ伴奏で、ソプラノが歌っています。

K120 と K121 も、交響曲の終章と思えますが、子細はわからず、この CD にも収録されていません。

K122 は メヌエット 変ホ長調 で、トリオもない短い 1 分余りの曲で、1770 年 8 月にボローニャで作曲されました。

K123 は コントルダンス(田園舞曲) 変ロ長調 で、1770 年 4 月にローマで作曲された 1 分余りの短い曲です。

K124 は、交響曲 第 15 番 で、既述。

K125 は、聖体連禱のためのリタニア 変ロ長調 で、1772 年 3 月にザルツブルクで作曲されました。キリエから神の子羊に至る 9 曲からなる 30 分余りの管弦楽に比重がかかった美しい音楽です。

K126 は オペラ「シピオーネの夢」です。1772 年 3 月ザルツブルクで作曲されました。皮肉なことに、その後敵対したコロレド大司教の就任祝賀祭典のために作曲されたものです。これは、祝賀祭典の音楽のためか、モーツァルトのオペラとしては、ほとんど顧みられていません。この CD では、2 枚にわたり演奏時間 100 分程で、序曲と 12 曲のアリアと合唱からなっています。現在映像で見られるのは、モーツァルト生誕 250 年の 2006 年にザルツブルク音楽祭で、モーツァルトのオペラ全曲が演奏された時の DVD があるのみです。



K127 は、レジーナ・チェリ(聖母交唱) 変ロ長調 です。1772 年 5 月にザルツブルクにて作曲されました。聖母マリアにキリストの復活を祝う音楽で、前述の K108 と同じ趣向で作られています。フルート・ホルン各 2 に弦五部とオルガン、独唱と 4 部合唱の編成で 3 楽章よりなる、華やかな 15 分の曲です。

K128、K129、K130 は 交響曲 第 16 番～第 18 番 で、既述。

K131 は、ディヴェルティメント 第 2 番 ニ長調 でザルツブルクで、1772 年 6 月に作曲されましたが、動機や目的は不明です。フルート・オーボエ・ファゴット各 1、ホルン 4、弦 5 部の編成で、全 7 楽章 30 分余りの曲です。

K132、K133、K134 は、交響曲 第 19,20,21 番で、前述。

これで、第 6 回で飛ばした部分を訪れることができました。次回は、第 6 回と、この第 7 回で巡った先の K176 から始める予定です。

(続く)